

—奈良県東吉野村高見小学校を事例として—

○前田真子* 西村一朗** (*奈良女大・院, **奈良女大)

【目的】高見小学校では、高齢化・過疎化に伴う生徒数の減少や学級の複式化を防ぐために山村留学を行っている。本研究では、山村留学を都市・農村交流としてとらえ、山村留学が都市住民や地域住民にどのような影響を与えているのかを明らかにする。また、児童、P T A、過去の留學生の生活実態と山村留学の現状を把握し、山村留学を続けていくための課題、環境整備課題についても検討する。

【方法】東吉野村高見小学校の児童36名(地元生25名、留學生11名)、P T A26名(地元生P T A21名、留學生P T A5名)、過去12年間の留学経験者65名を対象としてアンケート調査を行った。調査時期は2000年10月～11月である。

【結果】留學生や留學生家族は自然環境への憧れを抱いており、それが高見小学校への山村留学に結びついている。留學生や留學生家族は東吉野村での生活が、自然との親しみや地域住民との交流へとつながっている。また、地域住民も留學生や留學生家族と生活することが、自然環境への再認識や都市住民との交流へとつながっている。

高見小学校の山村留学は、主にP T Aが里親となって留學生を預かる里親制度を取り入れていることが特徴であるが、近年では少子化、高齢化による受け入れ家族の減少などが原因で、里親制度から転居制度へ転換していかなければならない時期にさしかかっている。今後は留學生家族のための住宅確保や相談窓口の設置など、家族転居者を受け入れる体制を整備充実していくことが課題である。